

あとがき

編集委員を務めているので、これまでいくつかの投稿論文を査読した。査読の際いつも思い出すこと、それは投稿しながらも（本雑誌ではない）厳しい審査結果を受けた私の研究者としての初期の頃のことである。私の経験では、厳しい判定であっても、比較的スムーズに進行した論文であっても、ほとんどの査読者は投稿論文を熟読していたし、初歩的な間違いから論旨の設定まで、その多くが適切な意見や指摘であった。1～2回にわたり、査読者と意見を交換する中で私の投稿論文の中に「独り善がり」「論旨展開やオリジナリティーの不明瞭さ」が発見され、それらを訂正する中で、公表に耐える論文に仕上がっていくのが自分でもよく理解できた。厳しい判定を受けた直後は「何故、私の主張を理解してくれないのだろうか」と不満が強く、1～2週間は査読者が記載している審査結果理由の再読を避けていた。その後、査読者と意見の交換を行う中で、査読者も私の主張に理解を示してくれると同時に、私自身もその主張の中に「独り善がり」の論旨を展開していたことに気づき、査読というシステムの有難さを痛感した。

査読を受ける意義は様々あると思う。初歩的なケアレスミスのチェックの意味もあろうし、論旨展開の間違いや言い過ぎの是正、事実誤認の訂正という効果もあろう。「自分の論文はオリジナリティーがある」と思っている、本人がカバーしていない文献に、そうした論調とそれを支えるデータが掲載されている事は少なくない。第三者が冷静に検討するシステムは雑誌の質を高めることにもなるし、投稿者にとってもよい結果をもたらすものである。

ところが、環境教育学会は査読について一つの課題をもっているように思う。それは環境教育がもつ範囲の広さから生じる課題である。学問分野としては自然科学系、人文系、社会科学系、さらには教育理論から教育実践まで広い範囲にわたっているが故に、編集委員会は適切な査読者の選定

に苦勞している。学会全体で支える査読体制が必要になっているように思える。

（樋口 利彦）

査読者一覧

| | | |
|-------|-------|-------|
| 生野 晴美 | 市川 智史 | 石田 康幸 |
| 伊藤 清忠 | 岩本 陽児 | 上原 巖 |
| 延藤 安弘 | 小川 博久 | 奥井 智久 |
| 金田 平 | 川嶋 宗継 | 北野日出男 |
| 鬼頭 秀一 | 木俣美樹男 | 倉本 宣 |
| 近藤 正樹 | 佐藤 治雄 | 佐島 群巳 |
| 鈴木 善次 | 高島耕一郎 | 高田 滋 |
| 高月 紘 | 中川 志郎 | 中川 重年 |
| 中山 和彦 | 西村 俊一 | 林 浩二 |
| 樋口 利彦 | 森茂 岳雄 | 山下 宏文 |
| 山田 卓三 | 和田 武 | 渡辺 隆一 |

編集委員会の判断で適任と思われる会員のかたに原稿の査読を依頼しています。場合によっては会員外のかたにも査読をお願いすることもあります。

 投稿論文を受理した通知が届きましたら、印刷原稿にするためにテキストファイルに保存したフロッピーディスクとプリントアウトしたものを一部用意してください。
